

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	笹部昌利（京都府）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	乙第57号
学位授与の日付	平成31年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学 位 論 文 題 目	幕末維新政治史の研究
論 文 審 査 委 員	主査 原田 敬一（佛教大学教授） 副査 李 昇燁（佛教大学准教授） 副査 岸本 覚（鳥取大学教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は、幕末維新时期における政治史の研究として、主な考察対象を、鳥取藩池田家、薩摩藩島津家、土佐藩山内家、佐賀藩鍋島家など大名家の国事運動におき、その解明を、「志士」と目された人々の政治運動や同時期の人物像の再検討などを通じて行ったものである。

序章では、膨大な幕末維新时期研究を紐解き、「幕末政治」と捉えることの再検討から、先行研究を丹念に批判検討して、幕末期を「過渡的政治形態」の時期ではなく、積極的に「幕末政治」と捉えることの必要性を指摘し、近世秩序から問題を捉えなおすこと、長州藩毛利家でなく、あえて他の諸藩からの解明を進めること、「志士」という個性に注目すること、などの問題を設定し、幕末維新史研究を前進させることを意図している。

〈第一章 幕末政治の生成とその背景〉では、〈第一節 背景としての近世大名家―鳥取藩池田家を素材に〉において、日本近世の政治制度や地位により形成される政治秩序が、幕末政治と関係する過程を、鳥取藩池田家を素材として検討する。特に「大名昵懇」と名づけられる池田家の家臣関係に注目し、当該期に特有の政治動向である「国事周旋」に対しての規定性を解明し、大名の指導性と「大名昵懇」家臣の関係が、鳥取藩池田家の政治的位置をつくりだしたと分析している。

さらに〈第二節 大名家よりの使者と近世京都―佐賀藩鍋島家の事例を素材に〉においては、近世国家における大名家と宮廷社会・京都との政治的関係を追究し、宮廷社会の儀式と大名家との関係を分析した。佐賀藩鍋島家の上京事例を取り上げ、宮廷社会の「慶事」や大名家の縁戚関係を機として、大名家の京都における政治活動が切り開かれていったことを解明している。

〈第二章 幕末政治と鳥取藩池田家〉では、〈第一節 攘夷と自己正当化―文久期鳥取藩の政治運動を素材に〉において、文久期の鳥取藩池田家の政治運動を素材に、国事運動に

おける「攘夷」主張の意義を考察している。大名家では、国事運動に携わることで政治的正当性を獲得することがめざされ、その中でも「攘夷」を標榜、主張することが選択されて、運動を展開した。さらに大名家中の藩士層からの政治的建白に注目すると、大名の政治判断からの自立的な傾向を見せ始めており、自家の正当性を確保するための政治運動という側面をも示すようになったと分析している。

次いで〈第二節 京よりの政治情報と藩是決定―鳥取藩の情報収集システム〉において、大名の京屋敷を拠点とする藩の京坂地域の政務機構によって幕末政治への対応について解明を進めている。鳥取藩池田家の京屋敷には、家中でその才知が高く評価された人材が当たり、彼らの政治判断が、特に文久二年以降の大名自身の政治判断に大きく関わったと評価した。従来の大名家の職制に存在していなかった「周旋方」・「探索方」という役職のありように初めて着目し、京坂の政治現場に所在する人々と大名側近である「大名昵懇」をつなぐ国事審議や政治情報システムのあり方が、幕末政治での判断を可能にした状況を明らかにした。

〈第三節 長州戦争と鳥取藩池田家一戦争に対する政治意思を素材に〉において、文久三年八月十八日の政変から慶応二年六月の第二次長州戦争開始に至るまでの鳥取藩池田家の政治運動について、長州藩毛利家の処分問題との関係性を考察している。藩主池田慶徳や大名侍講の堀庄次郎らは、内戦による危機的状況によって大名家の「社稷」が損なわれることを強く危惧し、これを主な要因として同家の政治姿勢が中央政局への非介入という選択を取らせたと結論付けている。

〈第四節 大名家における「国事」対応と組織・構造〉においては、藩主池田慶徳を中心とする国事対応システムが生成される過程に注目し、大名とその側役である「大名昵懇」、学館である尚徳館、京坂藩邸との関係や機能を分析し、あらたな役職「京都詰大奉行」が設置され、その後の迅速な態度決定に関わっていったことを明らかにした。藩校の教官などの人材が、大名側近としての役割を果たす事例を発見している。

〈第五節 幕末維新期の「農兵」と軍事動員―鳥取藩領の事例を素材に〉において、鳥取藩に設けられた「農兵」を取りあげ、幕末期の大名家の軍事における規定性について、その生成と展開から考察している。文久年間には大名による国事対応が頻繁化し、かつ京・大坂への兵事動員が繁多となったことによって、特に鳥取藩では領内の海岸警備の手薄さが浮き彫りになり、これへの対応として「農兵」による補填が図られた。しかし、軍事インフラの充実に重きを置いた藩当局の判断により、「農兵」育成はとん挫した。この折、建設された諸台場への対応が在地社会に委ねられ、このことが民衆の軍事志向性をうみだしてしまうことをも解明している。

〈補節 日本近代における「維新」観と近世秩序〉においては、鳥取藩主の側役を殺害し、のち長州藩領に逃れて政治活動を続けた藩士河田佐久馬らを、「因幡二十士」として顕彰する近代の捉え方について考察し、「勤王」を軸の顕彰であるがために、近世の政治秩序など重要な背景が無視され、実態から離れていく点が明らかにされた。

〈第三章 幕末期における薩摩藩島津家の国事運動と京都〉では、〈第一節 薩摩藩の国事運動と島津久光〉において、文久期の薩摩藩島津家の国事運動を対象とした。文久元年末から翌二年中甸までの約半年間を中心に、薩摩藩島津家の政治運動と近衛家の政治的意思を分析し、その相互関係を導き出し、それらの政治的意味を明らかにした。

〈第二節 薩摩藩二本松屋敷の政治的意義—島津家の「国事」と京の拠点〉において、薩摩藩内で島津久光の政治的主導性がどのように生成されたのかを対象とし、京都二本松に新たに建設された京屋敷が、久光の国政参加の拠点であること、久光の政治的主導性の表象でもあったことを明らかにしている。

〈第四章 幕末政治と「志士」—政治意識形成と行動〉では〈第一節 「人斬り」と幕末政治—土佐藩山内家の政治運動と個性〉において、幕末期の「志士」として認識されてきた人々の行動論理を解明するため、武市瑞山ら土佐藩山内家中有志の政治活動の中にあった「天誅」という名の「人斬り」に示される政治意識を考察して、単なるテロリズムに陥らないで、一定の公共性的論理が見いだされ、京・大坂には独特の「公論正義」が生み出されたと結論付けている。

次いで〈第二節 「志士」と由緒—丹波郷士の「志」と幕末政治をつなぐ〉において、丹波国住人の郷士湯浅五郎兵衛を素材とし、在地社会から国政への関与を志す人々のありようについて考察し、近世民衆の家の存続へかける意識とそこから生み出される「由緒」へのこだわりなどを解明した。

さらに〈第三節 山中静逸と幕末政治—「柳ノ図子」がつかないもの〉においては、三河国住人の志士山中静逸を取りあげ、山中の行った政治建白の内容を精査して、その意義について考察している。

人物論を追究した〈第五章 幕末維新人物像の形成〉では〈第一節 三条実美の政治意識形成とその転回〉において、公卿三条実美を対象とし、幕末期の公家の政治意識がどのように形成され、実際の運動へと発展していくかを解明している。注目しているのは、三条実美の政治的動向とともに、彼を政治的に利用した長州藩毛利家の政治的意図である。その結果、三条実美は、文久政変により京都を追われた長州藩毛利家の「名義」を保持する存在として捉えられていたことを明らかにした。

〈第二節 勝海舟の軍事構想と日本型華夷意識〉においては、幕末期の幕府吏僚である勝海舟について、その政治構想を分析して、儒学的素養から生成された世界観、殊に近世日本における外国認識の機軸たる華夷秩序との関係づけを見出し、彼の意識の中にある一種の保守性をあぶりだした。その上で西洋の「知」を受け入れ、軍事面の強化につなげようとした勝の先進性は、日本型華夷秩序意識を含めて考察されるべきだと結論付けている。

## 〔2〕審査結果の要旨

本論文は、総じて戦後歴史学の積み重ねてきた幕末・維新観に果敢に挑戦してきた著者の総括的なものである。学説史上、評価できる点は以下の通り。

第一に、幕末を「近代政治の始まり」と捉えるのではなく、「近世政治の終焉」として「幕末政治」を捉える視点である。そこから本論文は、日本近世の政治秩序に解明のカギを発見している。従来の幕末維新政治史は精緻な実証によってはいるのだが、「攘夷」と「開国」、「尊王」と「佐幕」などという政治主義を歴史認識のキーワードとし、人物や藩・組織などがあてはめられ、導き出されたとと言っても過言ではない。本論文は、19世紀半ばにうみだされた政治的混沌という「幕末政治」を、近世政治秩序の担い手である武家社会（大名・家臣・幕臣など）や公家社会、地域社会（草莽など）に焦点を当て、それらの社会や人々がどのように混沌に向き合い、行動していったのかを、丹念にさまざまな角

度から解明している。その中で、従来重視されてこなかった鳥取藩池田家史料を再発見し、駆使して歴史像の解明に向かっていることは特筆すべきである。

第二に、従来の幕末維新政治史研究では、変革主体の析出に重点があり、それも資料情報の豊富な長州藩毛利家を対象とするものが多かった。本論文はあえて長州藩毛利家ではなく、鳥取藩池田家の史料に依拠して新たな幕末維新像を描こうとしたところに意義が見いだされる。また焦点を変革主体の析出ではなく、「幕末政治」を構造的に捉えなおそうという試みでもある。まだ完成の域には達していないものの、政治秩序や序列、情報の獲得方法や伝達手段、草莽の登場と役割などその分析対象は広く、これらが構造として示されることが期待できる。

第三に、京都藩邸という都市空間を分析対象にすることの重要性である。薩摩藩島津家が臨濟宗大本山相国寺の境内に京屋敷を営んだことを、契約のありようや施設の政治的有効性などを問いかけ、公家屋敷との関連性や政治動向との関係性など、新たな論点を提示している。

第四に、草莽層など新たな人物を発掘し、その像を描くことで、幕末維新史に論点を提示している。社会的背景の究明は当然であるが、無名の人物の発掘は歴史理解を豊かにすることにつながる。

第五に、以上の歴史的究明や新しい論点の提示は、新史料の発掘や見直しによって可能となった。鳥取藩池田家史料や草莽湯浅五郎兵衛史料など、本論文で初めて本格的に検討されたものである。史料に対する著者の眼は確かなものである。

総合的には高く評価できるが、いくつかの不十分さも見られる。

例えば、様々な〈主体〉を分析対象としたために、全体の構成や記述に重複や乱れが見られることである。池田家・鍋島家・島津家など大名家の記述レベルと、公卿である三条実美の記述レベルが異なっているために、分析が分かりにくい点もある。鳥取池田家の近世構造も未解明のところがあり、藩士たちの政治行動についても今後の追究が必要である。また大名家を史料の残存状況の中で選んでいるために、その大名家を含んだグループ、萌芽的な党派とでも言うべきところを捉えきれていない。たとえば近世大名秩序では、親藩・譜代・外様大名という区分があり、本論文でも、鳥取池田家が「幕末政治」に登場する理由を、徳川家康との血縁関係、いわば準親藩的な自己説明から説いているが、それには岡山池田家との連携も考慮できるし、されねばならない。そうした〈血脈〉によるグルーピングや構造も考察されるべきであろう。

そのこととつながるが、先行研究を批判し、それに対抗するパーツは示しており、新しい論点も提示できているが、では「幕末政治」や「明治維新」の全体像は何か、ということについては、殆ど触れられていない。個別論証の域にとどまっている。これは今後の本論文の公刊やそれ以後の研究活動に期待したいところでもある。

それらの点は、著者の今後の研究で補われるであろうし、いわば若干の瑕疵とでもいうべきところで、大きな欠陥とすべき点ではない。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。